

国 語

1 研究テーマ

(1) 研究テーマ

「指導と評価の一体化」の実現に向けた学習評価の充実

(2) 研究のねらい

「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価について、悩みを抱える授業者は多い。「主体的に学習に取り組む態度」を適切に評価することについて、『学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編』には、「①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面」（文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2019）があるとしている。一方で、その評価の難しさについては、『教育課程企画特別部会 論点整理』において「目標準拠評価として、④学びに向かう力、人間性等の目標と評価の観点と⑤目標準拠評価の2側面を整合的に理解し、評価基準を設定することは多くの教師にとって困難」であり、「結果、形式的な勤勉さばかりが強調されるなどの実態も生じている」（文部科学省 中央教育審議会 教育課程企画特別部会 2025）という指摘について、課題の一つとして挙げている。国語科における「主体的に学習に取り組む態度」の適切な評価については、特に「読むこと」領域において検討の余地がある。このことは、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』（以下、答申という）に「高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現が重視された授業が十分に行われていない」（中央教育審議会 2016 p.127）と指摘されていることにも通ずる。

そこで、本研究では「読むこと」領域における「主体的に学習に取り組む態度」の評価を取り上げ、和歌を自分なりに解釈しようとする粘り強く取り組む中で、自らの学習を自己調整している生徒の変容について、生徒が単元を通して段階的に和歌の解釈を深めている様子や、その解釈の変遷から見取る方法を検討した。

2 実践事例

(1) 単元の指導と評価の計画

ア 科目名：「言語文化」

イ 単元名：作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、段階的に和歌の解釈を深めよう

ウ 単元の目標：

(ア) 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語の決まりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解できる。 [知識及び技能] (2)ウ

(イ) 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈できる。

[思考力、判断力、表現力等] B(1)イ

(ウ) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会と関わろうとする。

「学びに向かう力、人間性等」

エ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。(2)ウ)	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。(B(1)イ)	和歌そのものから始め、歌物語を段階的に読んで和歌の解釈を深めていく活動を通して、古典を読むために必要な文語のきまり、古典特有の表現などについて理解し、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈

		できるよう、粘り強く工夫する中で、自らの学習を調整しようとしている。
--	--	------------------------------------

オ 単元の指導と評価の計画 ○「記録に残す評価」

次	時	学習活動	知	思	態	評価のポイント・指導上のポイント
1	1	○洋楽を通して、「訳」と「解釈」の違いについて考える。 ○和歌の読解に必要な事項(字数、縁語など)を確認する。 ○資料を活用しながら、新古今和歌集の和歌「白玉か」に対して解釈を考える。 ○ワークシートに自分なりの解釈と、解釈した根拠をそれぞれまとめる。				○洋楽の歌詞を用い、古典作品に対する、「現代語訳」と「解釈」の違いを、生徒が意識できるようにする。 ○ここでは、辞書や教員側から提示された資料を用いて生徒が和歌を解釈する。
2	2	○『伊勢物語』がどのような作品であるか、概要を確認する。 ○『伊勢物語』「芥川」の、和歌「白玉か」より前の本文を、現代語訳する。				○生徒は、辞書で古語の意味を調べ、現代語訳する。 ○「係り結びの法則」など、解釈に関わる文法事項を確認する。
	3 4	○読解した本文の内容を踏まえ、和歌「白玉か」の解釈を考える。 ○自分の考えた解釈をロイロノートに <input type="checkbox"/> 入力する。 ○教室全体で解釈を共有する。 ○教室全体での共有を踏まえ、自分なりの解釈をワークシートにまとめる。	○			○新古今和歌集の和歌「白玉か」の和歌との比較を促す。 [知識・技能] 「記述の確認」ロイロノート 本文で用いられている古語の意味や解釈に関わる文法事項を根拠として、和歌を解釈しているか確認する。
3	5	○和歌「白玉か」以降の本文の文章を読解する。 ○和歌「白玉か」以降の本文の文章の内容を踏まえ、和歌の解釈を再度考える。 ○考えた解釈をロイロノートに <input type="checkbox"/> 入力する。				○ここでは、教員から提示されたジャパンナレッジ Schoolを活用し、全集や複数の図書館資料の中から生徒が自分で情報を選択し、和歌を解釈するよう促す。
	6 本時	○教室全体で解釈を共有する。 ○発表を踏まえ、自分なりの解釈をワークシートにまとめる。 ○和歌「白玉か」に対する、自分の解釈の変遷をグループ内で説明し合う。			○	[主体的に学習に取り組む態度] 「記述の確認」ワークシート 本文の内容を根拠とし、和歌の解釈を深めようとしたり、2次での解釈の内容と比較しようとしたりしているか確認する。
	7	○和歌「白玉か」に対する3回の解釈の中で、和歌の詠み手の心情を最も捉えていると思うものを選ぶ。 ○解釈を選択した理由について、その根		○	○	[思考・判断・表現] 「記述の分析」ロイロノート これまで取り組んだワークシートの記述をもとに、和歌に

	<p>抛とともに文章にまとめる。</p> <p>○古典作品や文学作品の解釈において大切なことは何か、単元を通して考えたことを振り返る。</p>			<p>対する自分の解釈を選び、その理由が記述できているか分析する。</p> <p>[主体的に学習に取り組む態度]</p> <p>「記述の分析」ロイロノート単元で取り組んできたことを振り返り、これからの学習に生かそうとしているか分析する。</p>
--	---	--	--	--

カ 授業実践例 (6時間目/7時間)

学習活動(指導上の留意点を含む)	評価の観点 (評価方法)
<p>1. 前時の学習活動を振り返る。(5分)</p> <p>2. 教室全体で各自の前時における解釈を共有する。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時で各自がロイロノートのカードに記入した解釈を、教室全体で共有する。その際、他の人と比べてどのような解釈をしたのか気付くことができるよう、授業担当者は解釈の分類を行う。 <p>3. 発表を踏まえて、自分の解釈をまとめる。(10分)</p> <p>4. 1次、2次、3次のそれぞれで考えた和歌「白玉か」の解釈の変遷を振り返る。(20分)</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで取り組んできたワークシートを読み、自分の解釈がどのように変化したかを振り返る。まず、自分の和歌「白玉か」の解釈の変化を通して気付いたことや、自分の解釈がどのように深まったかについて、個人で考える。その後、グループになり、考えたことを互いに説明し合う。 <p>5. 本時を振り返り、次回の学習の見通しを持つ。(5分)</p>	<p>[主体的に学習に取り組む態度]</p> <p>「記述の確認」ワークシート</p> <p>ワークシート本文の内容を根拠とし、和歌の解釈を深めようとしたり、2次での解釈の内容と比較しようとしていたりしているか確認する。</p>

研究実施校：神奈川県立伊志田高等学校(全日制)

実施日：令和7年10月29日(水)

授業担当者：上野 曜美 教諭

(2)「指導と評価の一体化」の実現に向けたポイント

ア 研究の背景

本研究は学習評価を中心に扱う。特に、「主体的に学習に取り組む態度」の見取り方について、「知識・技能」や「思考・判断・表現」との関連性、学習活動及び発問、評価の場面等から考えている。

まず、学習評価について考えるにあたり、「学びに向かう力、人間性等」が他の資質・能力にどのような影響を与えるのか。『神奈川県高等学校等学習評価の手引き』(以下、「手引き」という)に、「『学びに向かう力、人間性等』は、知識及び技能、思考力、判断力、表現力等をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であり、学習評価と学習指導を通じて『学びに向かう力、人間性等』の涵養を図ることは、生涯にわたり学習する基盤を形成する上でも極めて重要」(神奈川県教育委員会教育局 高校教育課 2022 p. 6)であると示されている。これを踏まえ、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力に関わる「主体的に学習に取り組む態度」を適切に評価することが、学びにおいては有効であると考え。では、学習評価においては、どのようなことが重要となるのだろうか。答申には、「学習評価の改善・充実に向けては、生徒の資質・能力の育成に向けて、指導の改善と評価の改善を一体として進めることが求められており、学習評価は、実際に指導したことから現れた生徒の変容を的確に見取り、更なる指導の充実に生かしていくためにも行われるものであるという、学習評価の

意義を改めて確認していく必要がある」(中央教育審議会 2016 p.105)と示されている。学習評価は、生徒の変容を見取ることのみならず、見取ったことをもとにして更に指導を充実させるものだということがわかる。こうした「指導と評価の一体化」を実現することが、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の上でも重要である。よって、生徒の変容を見取った上で次の指導にもつなげられる学習課題を開発することに研究の意義を見いだした。

一方で、「主体的に学習に取り組む態度」を適切に評価することに対しては、困難を感じる授業者が多い。例えば、見取りの一つに、振り返りシートを課題として設定することがある。生徒は授業中に考えたことなどを単元の中で何度かまとめ、単元を通して生徒の考えがどのように変容していったのかを見取るという方法がある。しかし、このような方法では、自分の考えではなく授業中に学んだことをそのまま書いたとしても判別ができない。そのため、自分で考えたことと、授業を通して学んだことを区別して意識的に書いているのかを見取ることが難しくなってしまう、適切な評価方法とは言えないだろう。以上を踏まえ、本研究では、生徒が単元を通して学習に向けて粘り強く取り組み、その中で自己調整したことを見取るため、「知識・技能」、「思考・判断・表現」の学習との関連性を意識した発問や評価場面の設定の工夫について検討する。また、その発問や評価場面については、答申に「『主体的な学び』の実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場면을計画的に設けること、子どもたちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子どもたちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。特に、学習を振り返る際、子ども自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要である」(中央教育審議会 2016 p.130)とあることから、「生徒に身に付けさせたい力」を生徒自身が獲得しようと粘り強く取り組み、その中で自己調整できるようなものとするのが望まれる。

イ 単元設定の背景

本単元では、生徒が和歌を解釈する過程に注目した。1年次に履修することの多い「言語文化」の学習において、生徒が和歌「白玉か」を解釈するときには、象徴性の高い語である「白玉」、「露」の意味や、和歌中の助動詞「まし」等の用法、時代や人物の背景を理解する必要がある。一方で、そうした知識を学習して現代語訳するのみの授業では、現代語訳することができても、「思考・判断・表現」する力を高めることにはつながらない懸念がある。そこで、和歌「白玉か」について、和歌自体の解釈から、歌物語である『伊勢物語』「芥川」の和歌より前の本文を用いた解釈、そして和歌より後の本文を加えた解釈へと段階を分け、それぞれ解釈する学習活動を行う。特に、『伊勢物語』「芥川」は、和歌の前後の記述で、和歌やその状況に対する説明の内容が異なるため、生徒が和歌「白玉か」を解釈する際に、段階的に考えを深めていくと仮定した。また、語句や文法に関する資料や、「芥川」の和歌を除いた本文の現代語訳の一部などについては、解釈に必要な材料を授業者から示し、授業者の解説に寄らずして生徒が自らの力で和歌を解釈するように促す。これにより、生徒の各段階における解釈を通して「主体的に学習に取り組む態度」を適切に見取ることができると想定した。

ウ ワークシートの設問に対する生徒の回答や振り返りの分析

(7) ワークシートの概要

本単元では、生徒は和歌「白玉か」を3回にわたり解釈する。その際、ワークシートでの設問は「和歌の詠み手はどのような想いで歌を詠んだか、自分の解釈を書いてみよう。」に統一し、3回それぞれで「解釈の根拠にしたこと」も書けるようにした(表1)。

3回の解釈を一枚のワークシートに並べて記録することで、粘り強く取り組む中で自己調整している生徒の変容を見取りやすくなった。また、生徒自身が解釈の変遷を振り返り、考えの広がりや深まりを実感できることも期待した。

表1 ワークシートの設問と授業で学習した内容

次	ワークシートの設問	各次の授業で指導した内容
1	① 和歌の詠み手はどのような想いで歌を詠んだか、自分の解釈を書いてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「訳」と「解釈」の違い ・ 和歌「白玉か」の読解に必要な事項(字数、縁語など) ・ 資料 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』(笠間書院、1999年)
2	② 和歌の詠み手はどのような想いで歌を詠んだか、自分の解釈を書いてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 『伊勢物語』について ・ 『伊勢物語』「芥川」の和歌「白玉か」より前の本文 ・ 本文中の古語の意味 ・ 「係り結びの法則」など解釈に関わる文法事項
3	③ 和歌の詠み手はどのような想いで歌を詠んだか、自分の解釈を書いてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 『伊勢物語』「芥川」の和歌「白玉か」以降の文章 ・ ジャパンナレッジSchool収録資料の提示 ・ 新編 日本古典文学全集(小学館) ・ 角川ソフィア文庫 ビギナーズ・クラシックス セレクト90(KADOKAWA) ・ 図書館資料の提示 <ul style="list-style-type: none"> ① 山本登朗『絵で読む伊勢物語』(和泉書院、2016年) ② 早稲田久喜の会『学びを深めるヒントシリーズ伊勢物語』(明治書院、2018年) ③ 俵万智『恋する伊勢物語』(筑摩書房、1992年)

(イ) 1・2次

1次では、和歌の読解について必要な知識を学習したうえで、新古今和歌集の和歌「白玉か」を解釈した。この段階では和歌についての資料における情報がそれほど多くなかったが、授業者から提示された「露」と「人」に関する資料(表1)によって、和歌で用いられる「露」は、「はかないもの」や「涙」にたとえられることが多いということを確認できた。この和歌における「露」は「はかないもの」と「涙」のどちらを表しているものであるのか、「人」とはどのような人物を指しているのかを軸に、それぞれ解釈を書くことができた。

2次では、『伊勢物語』「芥川」の和歌「白玉か」より前の本文の内容について確認し、和歌「白玉か」を解釈した。和歌「白玉か」より前の本文については、古語の意味や「係り結び」などの文法事項を確認した後に、現代語訳を確認し、教室全体で「男の心情」について考えた。本文を部分的に読んでいき、それぞれの範囲における男の心情を把握したのちに、男の心情がどのように変化したのかを考え、それぞれが考えたことを教室全体で共有した。この場面における和歌「白玉か」の解釈については、ほとんどの生徒が生徒Aのように、該当部分から読み取れる人物の関係性や詠み手の心情を根拠にして考えていた(表2)。また、生徒B、Cのように、1次で考えた「露」の意味を再考し、和歌の解釈を変えたり、解釈をより具体的に表現したりしている生徒や、1次で詠み手が「悲しみ」や「後悔」を感じていると解釈し、2次でその内容を具体的に考えて記述している生徒もいた。

表2 ワークシート記載の設問①、②における生徒の回答(一部抜粋、原文ママ、下線は筆者)

生徒	① 和歌の詠み手はどのような想いで歌を詠んだか、自分の解釈を書いてみよう。	解釈の根拠にしたこと	② 和歌の詠み手はどのような想いで歌を詠んだか、自分の解釈を書いてみよう。	解釈の根拠にしたこと
A	露が表すものは、「 <u>はかないもの</u> 」。詠み手は失恋などの悲しいことがあった。白玉(真珠)みたいにずっと大切にしかかったけどもう必要のないもの(思い)。もう実現しない恋。	露の縁語には「結」という語がある。反実仮想は、実現しないこと。「結」という語から、恋→反実仮想→実現しない恋→失恋	露→ <u>はかないもの</u> →女。 <u>消えなましもの</u> →自分と離さなければ食べられることもなかったらろうに。→ <u>男が流している涙を露とたとえ、それは何の涙なのか</u> →女を失った悲しみ、後悔、消えたいという感情。	消えたものは女。物語中に露と発言したから、男が過去で後悔していること。
B	露は涙で、訪ねてきた人は泣かせた人。叶わない恋の相手?	涙は目に丸くのってきらきらしているので白玉のように美しく見えた。	露は、 <u>はかなく消えやすいもの</u> だから、女性もすぐ男の前から消えてしまった。そんな女性を守ってあげられなかった後悔と悲しさも露で表していると思った。	女性が「あれは何」と露について訪ねてきたことから女性と露がつながって消えやすいものとして男から消えてしまった。
C	露は涙を表していると思う。全体的に後悔と悲しみを感ずる。	「消なましものを」の現代語訳である「消えてしまえばよかったのに」の「のに」の部分。	やっとのことで盗み出した女性が食べられてしまって、過去の行動・言動を後悔している。露は、 <u>はかないものを意味している</u> と思う。→女は鬼に一瞬にして喰われてしまったから。	男は女に草の上にある露がなにかと尋ねられたが、答えずに安全のため女の蔵に入れてしまった。それが原因で女は喰われてしまったため、あの時、「はかないものだよ」と答えて、会話の一つでも交わして思い出を作っていたらと後悔していると思った。

※波線は1次から2次への解釈において特に変化が見られた部分である。

こうした生徒の解釈の変化から、生徒が1次と2次それぞれで学習したことやそれらを比較検討して考えたことを踏まえて、自らの学習を調整して、解釈を広げたり深めたりしたことを見取ることができた。

(ウ) 3次

3次では、『伊勢物語』「芥川」の和歌「白玉か」以降の文章について内容を確認し、和歌「白玉か」を解釈した。その際に、ジャパンナレッジSchoolの全集や複数の図書館資料の中から自分で情報を選択し(表1)、それらを活用しながら和歌を解釈した。図書館資料については、和歌「白玉か」以降の本文の文章も含めて説明されているものや、解釈に関わる部分が詳しく書かれているものを用いた。これらは、授業者から提供されたものであったが、内容についての説明は授業者から特に行わず、生徒はそれぞれで資料の内容を読み込んだり、情報を活用したりすることができた。解釈を記述したあとに、登場人物である男と女の関係性や、ここでの鬼の正体などを教室全体で確認した。

表3 ワークシート記載の設問②、③における生徒の回答(一部抜粋、原文ママ、下線は筆者)

生徒	② 和歌の詠み手はどのような想いで歌を詠んだか、自分の解釈を書いてみよう。	解釈の根拠にしたこと	③ 和歌の詠み手はどのような想いで歌を詠んだか、自分の解釈を書いてみよう。	解釈の根拠にしたこと
D	男は <u>白玉を女にたとえて読んだ</u> と思った。また、 <u>露は「はかないもの」を表している</u> と思った。男はこの歌を読むとき、 <u>やっとの思いで手に入れた大切な物をすぐなくしてしまっただけ</u> の感じがしたと思った。	男は「長年にわたって求婚し続けた」とあり、女をやっとの思いで手に入れたが、鬼に食われてしまい、自分の大切な物を失ったときのそうしつ感やこうかいなどがあると思った。	男にとって女とは無知で愛らしく、 <u>白玉のように輝いているように見えた</u> と思った。「消えなましもの」は男が女を失ったことで <u>自らの生きる価値を失い、消えてしまいたい</u> と思ったからこそ出た言葉だと思った。女を失ったことで「あれは、なあに」と聞いたときにしっかりと返答してあげればよかったという思い。そして <u>自分も露のように消えてしまいたい</u> という思い。 <u>しっかりと返答していれば悲しまずにいたかもしれない</u> という思い。	女は身分の高い人で外の世界に関しては無知であったため、キラキラと輝いている露を白玉かと思ひ男に「かれは、何ぞ」と質問した。男は女を盗みだしたという言いまわしがされているが、男にとって女は宝石のような存在だったことが考えられる。しかし、男にとっての宝石だった女が鬼に食べられてしまったことで男の生きる意味がなくなってしまうから「消えなましもの」と呼んだのではないかと思った。
E	<u>真珠みたいにきれいな女性に露のことを「あれは何ですか?」と聞かれたときに「露(はかなく短い人生)ですよ」と答えて、二人で消えてしまった</u> という想ひ。 女性と過ごした短い時間は女性を亡くした男にとって辛い悲しいものだから消えてしまえばいいのと思った。	女性が生前に男性に露のことを「何ですか?」と聞いたところから和歌に出てくる人は女性であると思った。	結局、一緒にいられないのなら女性に「あれは何?」と聞かれたときに「あつという間に消えてしまおう、はかない露です」と答え、 <u>自分自身の心に秘めている恋心も消してしまえば良かった</u> 。 → <u>身分が違く結婚できないのなら、恋心を押し殺していればこんなに辛い思いもしなかったのに</u> 。 自分があきらめていれば生まれ育った場所から彼女を盗み出して彼女に辛い思いをさせなくてよかった。 <u>男と女が過ごした時間は露のように</u> <u>はかないものであり、最終的にその時間がうばわれてしまうなら最初から女に対する恋心も露のように消えてしまえば良かった</u> 。(あきらめていたら辛い思いをせずに済んだ。)	「学びを深めるヒントシリーズ伊勢物語」p.50「彼女の気持ちを無視した拉致と受け取られる可能性が高くなるだろう」
F	<u>長年したいづづけていた高貴な女性をやっと連れ出すことに成功したのに、自分が目を離したすきに鬼に食べられて女性がいなくなってしまう</u> 。そこで女性は「 <u>はかないもの</u> 」で消えなかったらよかったのに <u>男性が思っている</u> と感じた。	露を「はかないもの」と解釈した理由は、男がやっとの思いで女性を連れ出したのにすぐに鬼につかまって食べられてしまったから。	<u>長年したいづづけていた高貴でとても若く美しい女性をやっと連れ出すことに成功したのに、自分が目を離したすきに鬼二人に引き返されてしまった</u> 。そこで露は「 <u>はかないもの</u> 」をあらわしていると思った。「 <u>消えてしまえばよかったのに</u> 」は二つの意味をもつと思った。 <u>自分も女性と一緒に生きてしまえばよかったのに</u> という思いと女性との思い出や愛する気持ちが消えてしまえばよかったの <u>と解釈した</u> 。男は女性に「 <u>露</u> 」についてたずねられたとき <u>しっかりと返答してあげれば良かった</u> と深く後悔していると思った。	とても若い資料①のp.17の「草の露をみたこともない深窓の姫君」から解釈した。鬼を兄二人と解釈した理由は資料①のp16「ひどく泣いている人の声を聞きつけて、引きとどめて妹を取り返された」と書いていたから。筆者は兄二人が鬼のようにみえたと考えた。資料②のp.49の「失って気づくかけがえのない人への思い」を自分の女性への気持ちが消えたらと解釈した。露をはかないものと解釈した理由は真っ黒の夜道でキラキラ光る露を女性と同じようだと感じたから(資料③のp.24「草の上に夜露が玉を結び、キラキラと光っている」)

※ 波線は2次から3次への解釈において特に変化が見られた部分である。

3次では、生徒Dのように、女性を失った詠み手の悲しみに注目した解釈が多かった(表3)。本単元における和歌「白玉か」の現代語訳は、「真珠ですか、何ですかと人が尋ねた時に、『露』と答えて消えてしまえば良かったのに。」という直訳であるが、資料①及びジャパンナレッジSchool収録資料の中には、「消えてしまえば良かったのに。」に続けて「そうすればこんなに悲しまずにすんだのに。」と記載されているものがある。生徒Eは、資料を読むことで登場人物の関係性を和歌から読み取り、詠み手の心情の切実さに思いを致すとともに、「鬼」という言葉について、関係性を示すものであったと再考している。生徒Fは、資料を活用して、2次で解釈した内容に新たな解釈を加える形式で記述している。このように、生徒はそれぞれ資料活用することで、詠み手の心情にまで深く解釈しており、それまでとの違いを確認することができた。

また、評価の面から生徒の記述に着目すると、多くの生徒の記述に、教室全体での共有後に改めて自分の解釈を見直し、自分の解釈を再構築しようとする様子が見られた。このような記述から、生徒が粘り強く知識や技能を獲得しようとしたり、粘り強く解釈を深めようとしたりするなかで、自らの学習を調整して学んだ姿勢を見取ることができたと考えている。

エ 成果と課題、今後の展望

(7) 研究協議及び生徒インタビュー

授業後に、生徒3名を対象とした生徒インタビュー及び授業参観者による研究協議を行った。生徒インタビューでは、今回の授業の感想や、「主体的に学習に取り組む態度」の評価についての考え等を聞き取った。研究協議では、「本研究における授業実践の成果と課題について」、「『主体的に学習に取り組む態度』の評価について」、「『指導と評価の一体化』に向けて」を協議テーマとした。

研究協議及び生徒インタビューから見えてきた本研究の成果と課題について、「生徒の様子」「評価方法」の二つの視点から次に記す。

(1) 生徒の様子

良かった点としては、本時の授業の中で、生徒が「情報が増えるにつれて解釈が深まった」と話している様子が見られた。研究協議のなかでも「生徒が自分で解釈を作っていく授業であった」、「解釈の変化を感じられる授業であった」という感想が挙げられた。

授業後の生徒インタビューでは、授業の構成について、「自分で考えるのが面白かった」、「ワークシートの構図が、解釈の変遷を振り返りやすいものであった」、「最初は自由に想像できる反面、解釈が難しかったが、授業が進むにつれて勉強したことを使って解釈できるようになり、解釈が変わっていった」という感想が挙げられた。一方で、「結局どの解釈が良かったのか気になった」という感想もあったが、「授業者の声かけによって、生徒が自分なりに解釈して良いという意識も持っていた」、「評価については気にしていなかった」とのことであった。生徒が安心して主体的に考えられるように、授業者が積極的に声かけすることが重要であると分かった。

同じく生徒インタビューで挙げられた、「(解釈が深まっているはずなのに、)3回目の解釈は、完全に納得がいくものになっていかなかった」という感想にも注目したい。生徒が自分の解釈について納得できるかという視点をもっていたということは、自分の解釈について粘り強く考え、自己調整を図っていたということでもある。ただ3回解釈をして終わりにするのではなく、第7時において、「3回の解釈の中で、最も詠み手の心情を捉えていると思うものを選ぶ」活動をすることで、自分の解釈について考え直す機会を作ることができ、生徒全員に同様の視点をもたせることができたと考える。また、必ずしも3回目の解釈が最も納得できるものではなかったことから、生徒が授業で得た情報を活用して粘り強く解釈し、その変遷からさらに解釈を深められるようにするという単元構成の目的に沿って授業を進めることができたといえる。

今後の課題として挙げられたのは、解釈の深まりについて、上手く言語化できない生徒がいたことである。今回のワークシートでは、授業者の側で生徒の解釈の変遷から、生徒の考えの変容を見取ることができる。しかし、生徒の解釈に変化がない場合、解釈の深まりを生徒が実感できず、授業者も見取ることが難しい。また「解釈の根拠にしたこと」についても、上手く書けていない生徒が多く見られ、生徒インタビューでも「根拠を書くことが難しかった」という発言があった。根拠を上手く書けていなかったことで、振り返る際に解釈の深まりを言語化しづらく感じた生徒もいたであろうと推測する。この点について、どのようなフォローをすればよいか検討する必要がある。

また、ワークシートから生徒の解釈の変容を見取る際のよりどころとなる評価規準の設け方、評価にかける時間や労力にも課題が残る。

(ウ) 評価方法

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、生徒が自分なりに学習に向けて粘り強く取り組む中で自己調整することで初めて可能になるが、本授業の成果としては、生徒が自分なりの解釈をもつことに対して肯定的な気持ちを持って取り組むことができた点が挙げられる。本単元では、最初に現代語訳するということと、解釈することの違いについて、洋楽を用いて例にして生徒に説明している。生徒インタビューでも、上記の例を挙げ、自分なりに解釈しようということを意識したという回答があった。このことから、本単元は、生徒が授業者に説明された内容をワークシートにそのまま書くような学習にとどまらず、生徒が自分なりに解釈しようと粘り強く取り組む中で自己調整することになるような単元となったといえる。

一方で、課題として挙げられることもある。第一に、「主体的に学習に取り組む態度」のA評価とB評価をどのように分けるかということについては、検討の余地が残る。ワークシートから見取ることができる生徒の変容には、個別の違いが大きい。一般的な振り返りシート等では見取りきれない生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を見取ることができるようになりたいと思う反面、そうすることで評価は複雑化する。この両者のなかでの葛藤を克服できなかった。これには、授業を通して生徒にどのような力を身に付けさせるのかを、より一層明確化し、評価規準に落とし込んでいく必要があった。

この点については、『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』で、「評価の対象とする学習の調整に関する態度は必ずしも、その学習の調整が『適切に行われているか』を判断するものではなく、それが各教科等における知識及び技能の習得や、思考力、判断力、表現力等の育成に結び付いていない場合には、それらの資質・能力の育成に向けて児童生徒が適切に学習を調整することができるよう、その実態に応じて教師が学習の進め方を適切に指導するなどの対応が求められる」(中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 2019)とされている。手引きでは、「①の『粘り強い取組を行おうとする側面』が十分に認められたとしても、②の『自らの学習を調整しようとしている側面』が認められない場合には、『主体的に学習に取り組む態度』の評価としては、基本的に『十分に満足できる』(A)とは、評価されないことになる」(神奈川県教育委員会教育局 高校教育課 2022 p. 7)とされている。そのため、生徒がどのような力を身に付けるのかを、評価規準とともに明確にする際には、学習の調整が「適切に行われているか」といったことや、表面的に見られることによってのみ粘り強さを評価するような規準を提示することは避けたい。

第二に、今後取り組むべき課題として、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について生徒に対してどのように認識させるのかという課題が挙げられる。生徒インタビューの際、「『主体的に学習に取り組む態度』とはどのようなものだと考えているか」という問いに対して、生徒からの回答は、「どれだけその授業が好きか」、「授業中に起きているか」、「提出物を出しているか」、「積極的に発言したり書いたりできているか」といったものだった。こうした認識に対して、単に適切な学習の調整の仕方を指導したり、表面的な粘り強さを助長したりすることのないようにしつつ、生徒に対して「主体的に学習に取り組む態度」の評価を説明するには、主体的に取り組む対象となる学習活動の目的を共有し、生徒自身に学習の見通しをもたせることが重要となる。具体的には、学習活動の目的として、単元の終わりにどのような力が身に付いてほしいかを説明する。だが、学習活動の目的に合わせて「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準を設定すると、評価する対象が「思考・判断・表現」と近接することになり、生徒は「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価を混同して認識することになりかねない。本単元で使用したワークシートでは、生徒が記述する内容は「思考・判断・表現」の内容だが、ワークシート全体を通して評価するのは「主体的に学習に取り組む態度」であり、粘り強さや自己調整を、記述内容の変化から見取る。そこで、生徒に「主体的に学習に取り組む態度」の評価について適切に認識させるためには、学習活動の目的を評価規準に反映させるだけでなく、生徒が自他の取組を客観的に振り返る活動を行いつつ、その過程が評価の対象であるということを生徒に対して伝えることが肝要である。例えば、本単元では、生徒が和歌を自分なりに解釈する活動は、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈することを目的としており、これは「思考・判断・表現」の内容である。しかし、単元を通して自他の解釈を客観的に振り返る活動を行い、解釈が深まって

いく過程を「主体的に学習に取り組む態度」の評価の対象とすることを生徒に対して説明することで、生徒は、和歌の解釈を深めるために粘り強く取り組み、その中で自己調整することが「主体的に学習に取り組む態度」として評価されるのだと認識することができる。また、自他の取組を客観的に振り返る活動を行う中で、授業者から生徒個人や全体に対してフィードバックが示されることで、生徒が自分の立ち位置や考えの深め方を理解し、自己調整していくことになる。そのような主体的に学習に取り組む態度」の評価を意識した授業者からの働きかけが「主体的に学習に取り組む態度」の指導に生かす評価となり、指導に生かす評価を生徒に示しながら単元を通して継続的に行うことで、生徒と授業者の「主体的に学習に取り組む態度」の評価に対する認識が一致してゆき、記録に残す評価についても、適切に評価できるようになるものと考察する。

引用文献

神奈川県教育委員会教育局 高校教育課 2022 『神奈川県立高等学校等学習評価の手引き』

中央教育審議会 2016 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』

中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 2019 『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』 p. 11

文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2019 「学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編」 p. 9

文部科学省 中央教育審議会 教育課程企画特別部会 2025 「教育課程企画特別部会 論点整理」 p. 76